

私の現代中国学の方法

—中国における土と農からの考察—

高橋五郎

(愛知大学国際中国学研究センター元所長)

中国研究方法についての一般的な方法を ICCS (国際中国学研究センター) では模索してきましたが、その一般的な方法とは何か。これはまた難しく、まだまだ道半ばです。

ICCS ができて、2002 年からもう 16 年目ですが、この間、初代所長の加々美光行、2 代目が私、3 代目の周先生ということで、ある意味では連綿と、この問題に ICCS の総力を挙げて取り組んできているわけですが、なかなか一般的な「これでどうだ」と言えるほどのものは、まだ出来上がっていません。

時代の変化、国際関係の変化、さまざまな技術の変化等々がありますので、固定的なものを「これだ」と考えて、つくり上げることは難しいかもしれません。常に流動的ではないかと思えますので、その時々、さまざまな情勢の変化に応じて考えていくことが、一般的な方法に関してもいえることではないかと思えます。

そうした一般的な方法が、まだ十分に出来上がっていないうちに、個人的なお話をさせていただくのは大変心苦しい点もないではありません。私は生まれてから農業が身近といえますか、私自身は農業経営者ではありませんが、家が農家でした。そのようなこともありまして、物心ついた頃から、ずっとそばに農業があったという関係でもありますし、単に農業が身近であったことだけではなく、食料問題との関係においても、農業は大変大事なことだと思っていました。

1948 年に生まれました新潟県の農村地帯です。米しかできない地帯です。私自身は農業問題以外にあまり関心がありません。もちろん、工業発展や商業発展など、それらが人々の暮らしを豊かにして、また暮らしの豊かさを安定させる。そして、人間世界全体の高度な文明社会を生きていくという意味で、大事なことであることは言うまでもありません。一方において、食べることなしに何事も始まらないし、お腹が空いては何もできないということも真実です。これはいかに高度な発展を、工業発展や文明の発展があっても、胃袋だけは変わらない。

工業発展したからと言って、今まで 3 度食べていた食事を 2 度で済むようになったとか、あるいは 1 粒のビタミン剤を飲んで、空腹がなくなった。また栄養分も十分に取れるということにはなっていないわけです。やはり、食べるものは変わっておりません。そういうこともありまして、ずっと拘っているということもございます。

今日の講演のタイトルですが、「中国における土と農からの考察」というサブタイトルになっています。まず最初に、土です。これがまさに私がこれまで取り組んできた、中国に限らず、日本を含めて、世界の農業地帯を回ったときに、まず見るものです。農村へ行っても、道端の土、畑の土、水田の土、見るだけではありません。触ります。触るだけではありません。嗅ぎます。時々なめます。も

もちろん、つかみます。そして、手のひらで擦ります。また、その触る、見る、嗅ぐ、時々なめるといふ行為を通じて、この土には何が入っているのか、何が入っていないかということが、ある程度、わかるようになりました。これは私が生まれたときから、泥と共に、田んぼの土と共に暮らしてきたので、ありがたいですね、私の生まれの関係があるかなと思います。

村で生まれ育ちましたので、農家の人たちが一番大事にしていることは何かがよくわかっておりました。何かと申しますと、土づくりです。土づくりなしで、農業は始まりません。

そして、ひとたび植物を植えて、野菜でも米でも植えまして収穫します。収穫した後は、必ず丁寧に掘り返してきれいにしておく。掘り返しっぱなしとか、抜きっぱなしとかに絶対にしません。最初から耕して、最後は収穫した後もきれいにしておく。これが習慣です。ずっと、その土と共に生きていく。土づくり、土を大事にする。彼らにとって土は命ですから、その命が健康であれば、自分たちも健康でいられる。健康なものをつくることができる。これは言うまでもありません。農家の人たちは生まれながらにして身に付いているわけです。それを私はそばで見えていますので、もちろん実践は、たまにしかしません。いかに大変かということは、手伝いをしてみるとわかります。全て重いです。土を耕す。収穫物を何かで運ぶ。全て重いです。

しかし、農民は一言も文句を言わずに、できたものは太陽と土と、自らの労働の成果ですから大事にしている。大事にしながらも、時々、暴落して捨てるを得ないような悲しい出来事もございます。

ということで、私の土とのこだわりから農業を見る。このような見方もあるということをお聞きいただければ幸いです。

(スライド)

私の研究は、農学です。農学というのは範囲が広いです。時々、中国で名刺をお渡しすることがあります。学位は農学博士ですので、名刺をお渡しすると、「えっ？ 農学博士。何をされるんですか。何をされているんですか」と聞かれます。「私はつくっていない。農業経済ですよ」と言わないとわかってもらえない。なぜならば、中国には「農学」という分野はないからです。つい最近まで、「農業経済学」という分野もありませんでした。私は、農学のなかの農業経済学です。農学には、その他に、大学によっては水産業や林業が入る場合もあります。農業であっても農業機械・農業肥科学・土壌学・農芸化学といったような自然系の分野。私たちのような農業経済学・農業社会学といった文系の分野という具合にさまざまあって広いですが、そのうちの農業経済学。私が興味を持ってきた一つは「土地資本論」です。土地資本という概念は、中国にはありませんでした。そもそも「資本」という概念ができたのは比較的新しいのではないかと思います。

土地は資本である。自然とは違います。自然の土地と人間の手が加えられた土地は、性質が全く違います。そこには労働とお金と、さまざまな施設から生み出された成果が織り込まれている。そして、農産物をつくるという、まさに工場と同じような性格を持っています。

中国は研究の一つの舞台です。「中国的」ではありません。「中国の」ではありません。私にとって農業研究は、中国は一つの舞台です。日本の農業にも関心があります。東南アジアの農業にも関心があります。アメリカもヨーロッパも関心があります。私にとって、国名は二の次です。

ですから、中国の農業の研究者ではありません。農業について、中国ではどうなっている

のか。中国の農民はどのような生活を、どのような方法で、どのような技術で農業をおこない、できたものをどのように評価すべきで、どのように売っているのかというところが関心事です。

つまり、私にとっては農業が関心事です。家をイメージしますと、1階は農業、2階が国です。2階には小部屋がありまして、中国の部屋、日本の部屋、アメリカの部屋、韓国の部屋、あるいはイタリアの部屋などになっています。それが私の頭のなかの構造です。ですから、私は自分が中国研究者だと思いません。私は農業研究者です。農業が、中国でどう展開されているのか、これが私の課題です。ですから、いつでもアメリカへ行って、アメリカの農業がどうなっているか。そして、身近である日本の農業がどうなっているかということに、常に関心があります。もちろん、中国に最も関心があります。

多くの地帯の農村へ行きましたが、中国全体に行くことは、おそらく不可能ではないかと思うぐらい広いですから、単に何カ所か行ったに過ぎません。ですから、私は中国のことをよく知っているという気持ちは全くありません。理解しようとしても難しいです。農業を取り上げてみても、場所によって全く違います。農業というのは、都会の方は食べるだけを通して、農業というものに接するかどうか、思いを至る機会があるかもしれません。農業は、風の吹き具合、日の当たり具合、地下にある水、雨の降り方、これによって全て出来が違います。

いい例は、ミカンです。ミカンは全て斜面につくります。温州ミカンです。ここに書いてありませんが、斜面にミカンを植えます。なぜ、そうするのかというと、日の当たり方、土壌、水、全て違います。出来が違うわけです。甘さ、香り、大きさ、色、全て変わってきます。農業は、どの場所を取るかが問

題です。どこにミカンの木を植えるのか、どの土地でミカンを栽培するのか。これによって全く違ってきます。

静岡でも蒲郡でも、愛媛でもみんなそうです。最近、平らなミカン畑が出てきましたが、これは労働力がないからです。今までは全て斜面につくるのです。全て違うからです。

日本では、その斜面につくったミカンが場所によって違うのであれば、必ず集落の間で争いが起きます。自分がいい土地であれば、誰も文句は言いません。しかし、先ほど言いましたように、農地は全て違いますから、出来が違います。小さな集落のなかで「なんで俺がここで、あいつがあそこなんだ」と必ず争いが起きます。その争いをなくすために、知恵を働かせました。これを「割地制度」といいます。おそらく、中国にもあると思います。

「割地制度」は、お互いに自分の農地を交換します。今までいいところをつくっていた人が、ちょっとよくない土地で、今までよくない土地でつくっていた人は、ちょっといい土地でつくるといのように回るわけです。回らないと集落が動かないのです。日本には、集落単位で営農する、農業するという仕組みができていました。ですから、公平なのです。これは知恵です。ここから競争になりません。ですから、日本の農家は競争しないのです。いくら市場主義者が「日本の農業は競争が足りない」とか、「もっと競争原理を導入して競争しろ」、「ミカンを安くしろ」ということを部外者が言います。

ところが、市場原理でもって農業はできないのです。もしやったら、競争して、われ先に自分の有利なところを奪ってしまいます。水には水利慣行がありまして、勝手に使えるわけではありません。河川から引いてきた水路を通して、だんだん細かくして血管のよう

に水を飛ばしてくるわけです。水はいつも豊富であるわけではありません。足りないときもあります。これはお天道さまじだいですから、たくさん降るときもあれば、足りないときもあります。たくさん降ったときは、たくさん降ったなりの協働で洪水を防除する仕組みをつくります。これは中国も同じです。日本も同じです。雨の降り方が足りないときは足りないなりに、みんな公平に水が行くようにしています。これを「水利慣行」といいます。ですから、どの農家も、いくら日照りであっても、同じように日照りの被害が起きます。上流の人だけがいい思いをして、下流にいる農家がつらい思いをする、損をするということはありません。少ないなりに、みんなで分配します。水の管理をする人を当番で決めます。いくら渇水の時でも、大雨が降ったときでも、農業全体が同じ成果、同じ被害を受けます。これが村落です、集落です。そのような慣行制度の下で、農業がおこなわれます。この点は、中国も日本も変わりません。

ただ、中国では北と南、西とか東、地域によって、水資源が十分にあるところとないところがあります。また、宗教によっても若干違います。例えば、中国では、回族がそうだと思います。西のほうへ行くとたくさんいますし、または東北におられます。彼らが集団で住んでいるところは、非常に結束が固い水利慣行です。

私たち素人にはわかりません。ところが、歴史的につくり上げてきた水の分配制度を持っています。集落・地域全体が同じように暮らしていく仕組みをつくりました。これが社会の安定になるわけです。

ところが、いろいろな制度が入ってきます。例えば、回族が歴史的につくり上げてきた、さまざまな水利慣行に対して、例えば、近代化という波が襲ってきます。いい面もあります。あるいは工業化という波が来ます。そう

しますと、ここに工場をつくることがありますね。中国の場合、いとも簡単におこなわれます。工場をつくったら、今までの水路は全て埋まります。では、どうするのか、どうしようもないです。迂回してつくるほど、自由に土地は使えません。

例えば、1ヘクタールのところに工業用地ができて、工場ができる。これは中国の方から見ると、近代化・発展です。国内総生産(GDP)が増えていく一つの要因です。しかし、農民から見ると、余計なことなのです。しなくたっていいのです。そこが矛盾です。この矛盾を、いわば「農業」と「近代」という波が、どのようにうまく調整されて、お互いにwin-winで仲良くやって、お互いによりいいものができれば、こんなにいいことはありません。

日本も同じです。日本でも工場が来たりすることがあります。私の新潟もそうです。たくさんは来ませんが、たまに来ます。そうすると、今、申し上げたようなことで、水利慣行が変わってしまうのです。

ところが、町や県は「工業発展だから、おまえら、我慢しろ。雇用機会も生まれるし、若者も戻ってくるよ」ということを言われると農民は弱いのです。しかも長いものには巻かれろということで、行政には弱いのは日本も中国も一緒です。そして、ついには承諾する。そこから、いろいろな問題が起きてきます。例えば、公害問題が発生します。工場が排水を垂れ流す。工場の排水は、化学工場でも何でもそうですが、100%元の水にして流すことはできないです。薄めることはできるし、ある程度、障害物を除去して流すことはできますが、今まで清流であったところに、若干でも何かの物質が入ると、植物は敏感ですから反応します。

私は土にずっと関心を持ってきました。研究手段は、小さな、これよりも小さな携帯

式の顕微鏡を持っています。私が村へ行くときは、二つあります。一つは家庭園芸用のスコップです。なぜ持っていか、土をこやって掘るためです。中国の土は、指で触っても取れない土が多いです。そこから私の農業の研究が始まってまいります。

もちろん、土だけではなく、いろいろなものを見ますが、その代表的なものは村です。土を見ながら、その土を耕している人の農地全体に対する愛着心、土に愛があるのか、ないのか。何事もそうですが、土に限らず、愛があるかないかは、その人がその対象に接するときの最大の価値基準です。

そして、果たして、今の農地制度が土と合っているかどうか。土から見て、果たして、この地域で農地制度が適正なのかどうか。中国の土は硬いです。柔らかいところがあるのですが、柔らかいところは有機物がない。土を通して農地制度を考える。果たして現代の農地制度が、特に土を通じて適正であるかどうかを考えます。そこから技術も見なければなりません。農業技術と技能です。技術というのは社会的なものです。技能は個人的なもので、技です。

例えば、枝豆というのは、同じ種でも、同じ品種でも、農家によって、つくる人によって香りと味が違うのです。なぜでしょうか。どの農家も極意を持っているのです。人には教えません。隣の農家に教えません。自分の家で作った茶豆のつくり方は教えません。なぜ、教えないのでしょうか。自分の家ずっと伝わってきた、いわば家宝なのです。ですから、教えません。そして、いいものをつくる。この点に関しては競争かもしれませんが、極意があるわけです。これが技能です。限られた与えられた土、土壌のなかでどのようなものをつくるのか。これは農家の、おばあさんの、おじいさんの極意です。これは大変貴重なものです。

この極意が伝承されていきます。健全な農家であれば、次から次へ伝承されていきます。ところが、今、これが切れるのです。伝承ができなくなっていく。このような時代を、日本も中国も迎えています。特に、中国は若い人が農業をしません。見方によっては、労働力が節約できて、生産性が上がったのだから、いいではないかということもいえるかもしれませんが。大多数の農家が自ら培ってきた技術を、技能を捨てているということです。

(スライド)

最近、大きな事件がありました。大豆の問題があります。大豆は、中国は世界一の消費大国です。ところが、自給率は12%~13%です。その状況のなかで、中米の貿易紛争のため、中国はアメリカからの大豆輸入をストップしました。

アメリカにとっては大問題です。アメリカは、対中貿易において、大豆の60%が中国行きです。ですから、アメリカも困りました。中国も困りました。

そこで、平成30年3月、中国政府は、急きょ東北の黒竜江省の農家に補助金を出すので大豆をつくりなさいと。1万単位150元を出すからつくりなさいと。ところが、ほとんどつくりません。なぜでしょうか。できないのです。技術がないのです。にわかに、「大豆がなくなったから、じゃあ、つくりなさい」という発想は、工業の発想です。農業はできないのです。もう技術がありません。ただ種をまけばいいというものではありません。土づくりや肥培管理など、いろいろとしなければいけない。広いですから手で収穫できません。機械も必要です。もう機械はない。そんなところに、いくら補助金を出してもできないのです。ですから、ほとんど増えませんでした。

今、中国全体は、そもそも自給率が低いので、大豆の作付面積を増やしていこうと、政

府が声を出して進めようとしているのですが、思ったようにいかないのです。なぜでしょう。理由があるはず。今、言ったようなこと。もう一つは、農家にとって、大豆をつくっても所得にならないのです。トウモロコシのほうが、まだいい。そのため、トウモロコシをつくるという状況です。

平成30年10月に、大豆産地へ行きました。真っ先に土を見ました。土に触りました。ひどい土です。

(スライド)

そこで、この図に戻りますが、「土づくり」、「土地改良投資」をしなければ、健全な土はできません。土壌は生まれません。ところが、現段階において、そうしたことを積極的に取り組んでいこうという動きが、残念ながら十分ではありません。

学術的に言いますと、土地資本。土地資本の自立の仕方によって、その農地、その地域の農業は上にあがったり、下にさがったりします。中国農業は、アメリカ式大規模農業の方向に行くのではないかと思います。日本においては、旧態依然とした小規模農業が残っていくでしょうけれども、これは時代とともに変わっていきます。中国こそが、アメリカ式の大規模農業にふさわしいのではないかと思います。

いろいろな意味です。一つは、粗放農業をせざるを得ない。人がいない。大きな機械を使って、ガサガサガサとやっていくしかないのです。アメリカと一緒に。アメリカのカリフォルニア州の農地を見たときに、驚きました。「こんなん、よくつくっているな」と思いました。

これは日本でいえば、土壌ではありません。単なる運動場です。運動場をトラクターでかき回して、「これから、じゃあ、大豆をまきますよ。小麦をつくりましますよ」というのと同じです。散々、化学肥料をまいて土を殺す。

これがアメリカ農業です。悪いことに、中国はそういう方向に行くかもしれません。

しかし、アメリカ農業は収量がよい。話がずれますが、大豆の80%は遺伝子組換えです。大豆、トウモロコシですね。アメリカは、中国以上に広いですから、人のことはあまり言えません。日本の大豆の自給率は5%、中国は12~13%、まだ中国のほうが高いです。中国のことは言えないほど、日本はひどいです。輸入している大豆の100%は、私は遺伝子組換えだと思っています。それを国は言いませんが。

皆さんも、納豆でもいいし、豆腐でもいいですが、大豆製品のパッケージをご覧ください。そこには、必ず「遺伝子組換えでない」と書いてあります。これが嘘なのです。さすがに、今度は「食品表示法」を変えて、実態に近いものにしていこうと、パブリックコメントを取って、そのような方向へ動いていきます。

中国の土だけが変だというだけではありません。日本の土も変です。日本の食品、日本の食文化云々かんぬんというお話を聞いたりしますと、耳が痒くなります。どこに日本の食文化が残っているのかと。お刺身を食べても、茶わん蒸しを食べても、日本料理を食べても、純粋な日本料理はもうありません。原料の大部分は輸入品です。あとはかたちをつくって、調味料をかけて、「おいしく、どうぞ」というのが、いまの日本文化、日本の食文化です。本当の日本食文化はもうありません。

経済史研究会という部活をしていましたので、そこで勉強したのは、レーニンの『農業問題とマルクス批判家』（青木文庫）です。原白寿の『農業問題入門』（青木文庫）という本は、今でも取ってありますが、ずいぶん読んだ跡があります。この栗原白寿さんは、夭折して45歳で亡くなります。栗原白寿さん

は、専門家でなければ、なかなかご存じないかもしれません。

それから、学卒後、博士課程、そして、勤労しながら多くの人と巡り合ってきました。とりわけ玉城哲（あきら）さんという人、この人は玉城肇さんの息子です。玉城肇さんには3人の息子がいまして、1人は玉城徹といまして、歌人（歌詠み）です。2番目が玉城素（もと）という朝鮮問題研究家です。玉城哲さんは農業問題ということで、いろいろと付き合っています。酒飲みでした。56歳ぐらいで、アルコール依存症で亡くなっています。酒に入り浸りで、いつもウイスキーを持って歩いていました。酒の飲み方を教わったというのか、人間破壊的な飲み方をする方でした。

（スライド）

堀口健治さんの『土地資本論』（農林統計協会）、この人は東京農業大学の先生で、早稲田大学の副総長をしておられた方です。この人とも研究会をやったりして勉強させていただきました。そして、東京大学の阪本楠彦さんです。農業問題以外では、ここにずっと書いてありますが、さまざまです。何だかんだとありますけれども。

（スライド）

結論だけ申しますと、私にとって「土」というものが、「中国の」ではなくて「中国に於ける」、中国に於ける土がどうなっているかを通して、中国の農業問題を見る。そして、そこにおける問題点を見ていくという手法です。一般的に言いますと、土を通して帰納法的に、中国の農業問題を研究していく見方です。とりわけ大事な点は、実証主義です。

私は現地調査が商売みたいなもので、調査を通した実証主義です。従いまして、「現地で観る・触る・聞く・嗅ぐ・食べること無しに書かず、喋らず、信じず」です。

ですから、私がこの本に書いたり、言ったりすることは嘘だとか、何だかんだと言う人がいますが、私は見たこと以外は話していません。全て見たことです。この何十年間の人生を通じて、見たこと、触ったこと、食べたこと、嗅いだこと、これ以外に言っていません。あとは、信頼できる友人が言ったこと、書いたこと、これは信じます。ですから、私にとって友人は大変大事なのです。友人は大変大事です。中国の友人、日本の友人。私が行けなかったところ、見られなかったところを伝えてくれます。そして、考えさせてくれる。こんな貴重なものはありません。

あと5分だけ時間をください。話したかったことは、だいたいお話ししたのですが、実証的に、これから写真をお見せします。お手元にはありません。

私はカメラが好きでして、もちろん下手の横好きですが、必ず写真を撮ります。もう何台もつぶしましたが、それで撮ってきたのが、この写真です。土です。土、土、土。

（スライド）

これが中国で撮った写真ですが、これは私の手です。これは何かと言いますと、先ほど申し上げたコテです。折れてしまうのです。今、ちょっと、ここに刺しているのですが、刺しているところが折れてしまった。これだけ硬いんですね。これは農地ですよ。運動場ではありません。

（スライド）

これは中国の稲です。専門家が見るとわかります。一目にしてわかります。何がわかるのか。みんな、高さが違います。虎刈りです。高さが、こうなっているでしょう？ なぜか、これは土づくりがまずいからです。種は、みんな同じです。米のもみんなは同じです。

（スライド）

これはあるところで撮った写真ですが、どれが草で、どれが植物なのかわかりません。

(スライド)

右が私の生家の、生まれたところの裏の近くの田んぼです。日本の農家は、きれいに草刈りをします。水田もきれいにします。秋になりますと、稲の高さは同じです。こんなにはなりません。なぜかという、土づくりを、きちんとやるからです。ですから、私の村の農家は、まず土を大事にします。いつも手はごつごつして、泥だらけです。

(スライド)

この田んぼを見ながら、日本の水田の稲は全く平らです。これをずっと、こうやって見ても平らです。

(スライド)

最近、中国でも堆肥をつくるようになってきました。ここにおられる大島先生は、朝日緑源というアサヒビールが山東省につくった。合弁会社の乳牛の飼育やイチゴなどを栽培する企業がありました。残念ながら撤退したようですが、そこの指導をなさっていました。そこでは堆肥をつくっていました。私も現場へ行ってきましたが、立派な堆肥でした。

(スライド)

先日、河南省へ行ってみたら、こんなものがありました。これは偽の堆肥です。堆肥ではありません。偽の堆肥です。こちらは何もない畑、こちらは偽の堆肥。なぜ、偽なのかという、臭いのです。牛や豚の糞をそのまままいているのです。これでは、土が泣きまです。細菌だらけ、雑菌だらけです。ですから、農薬をたくさんまいてしまうのです、そこに大きな問題があります。

ところが、このようなものが出てきました。川崎広人さんという方で、ご存じの方もいらっしゃるかもしれません。鹿児島で生まれて、盛岡の生協で仕事をされて、定年で中国へ渡った人です。64~65歳で中国へ行っていました。

(スライド)

彼は、このようにして堆肥をつくって売っていますが、簡単には売れないのです。農家は買わない。なぜかという高いからです。そのため、彼は今、苦勞しています。

(スライド)

堆肥というのはつくりますと、温度が80℃になります。臭いも消えます。なめて無害です。今、ここに温度計がありますが、だいたい70~80℃を指しています。指を当てています。これが本当の堆肥です。このようなつくり方がだんだん普及してきましたので、この先、いい思いができるかもしれません。

(スライド)

最後です。土壌がいかに大事か。だいたいわかるかもしれませんが、左は、中国S省のネギ畑です。右は日本のS県です。同じネギでも、土が違えば、こうも違うということがわかりやすいと思って、この写真をつくりました。

(スライド)

これは土壌がよくないです。土づくりをしていません。硬いです。右は農家が丹念に土づくりをした畑です。こちらに枯れた穂先を見てください。枯れたものは一つもないです。左を見てください。ずっと枯れているでしょう？茶色になっているでしょう？土がよければ作物が喜び、土が悪ければ作物が泣く。この差です。